製本のススメ　Vol. 87

春雨じゃ～濡れて帰ろうという名台詞がありますが、だいぶ暖かくなってきました。新しいランドセルを背負った子供達が、横断歩道を渡る姿はかわいらしいですね。年度のスタート！気持ちを新たに頑張りましょう。

今回は**紙取り**の話し

紙目の重要性はだいぶ浸透したようで、逆目の印刷物（見返し等も含）自体は減少傾向にあります。このススメも少しは役に立っているのかな？と思うこの頃です。
そこで、製本作業の基本的な事柄をひとつ！**製本作業は紙そろえと覚えて下さい**
つまり印刷位置がどこであろうと、紙のへりで揃えます（伝票はその典型ですね）
例えば複写伝票の場合、A紙もC紙も同じサイズの用紙の同じ位置に印刷されなくてはいけません。A紙はA4サイズ　C紙はB4サイズでは、複写を合わせることが極めて困難で(一般的には加工しませんが)引き受けてくれる加工所は少ないでしょう。
針・クワエが合っているからといって、横着な紙取りはいけません。
よくある事例に、見返しや扉があります。これらは本文用紙と違う場合も多く、また印刷が無い事もありますので、単純に用紙を冊子の仕上り寸法で計算してしまいがちです。しかし、用紙の寸法が**本文の折丁寸法より小さくなってしまう**と、製本作業はとても難しく、厄介な物になります。貼れない・そろわない・仕上りまでの実寸しかない・一冊の区切りがわからない等、安定した加工の妨げになります。特に糸綴りや折込みが多い等　特殊な製本加工の場合には、用紙の紙取りが仕上りの良さに直結するといっても過言ではありません。
ところで、見返し用紙を二つ折りにする際、単純に半分に折っていないのを知っていますか？前見返し・後ろ見返しと区別がつくように、折位置をずらしているのです。
当然　ずらす分だけ用紙が要るので、大きめに取らねばなりません。部数が増えれば増えるほど、この用紙サイズは重要となります。紙も高価で無駄に使えない事は理解できますが、これは無駄な余白分ではありません。加工に必要不可欠！なのです。
製本は紙揃え　ゆとりある用紙サイズで紙取りをお願いします。

Ｔｅａｂｒｅａｋ

お花見　送歓迎会と春は宴席が多いですね。さて宴席の発声は「乾杯」からですが、この乾杯という習慣は意外に新しく、1854 年の日英和親条約の晩餐で英国の習慣にならい、幕府の役人である井上信濃守（ｲﾉｳｴｼﾅﾉﾉｶﾐ）が発声したことが始まりとされています。でも英国の習慣ってわかっていたのかどうかは、少々疑問が残りますが、これをきっかけに「乾杯」が根付いたことは確かの様です。

by（株）井関製本